

研究叢書



# 針供養に就いて

東京女子専門學校研究

東京女子専門學校  
渡邊女學校

研究部







東京女子専門學校研究

針供養に就いて

東京女子専門學校  
渡邊女學校  
研究部



## 序

家事・裁縫・手藝について近來學術上からも、技術上からも或は又教育上からも、種々なる研究調査が行はれるやうになつたことは斯界のため誠に喜ばしいことである。本校に於ては久しき以前から各種の調査研究を行ひその報告書も相當の數量に達してゐるが、世の趨勢に鑑み、其等のうち特に研究家諸姉の御参考に適するものを選び、極めて簡明な文章に改め最安價に順次刊行して多少なりとも斯界に貢献したい念願である。教員諸姉の御一讀を給り且御批正を受くる事を得ば、望外の幸福である。

昭和九年十月

東京女子専門學校校長  
渡邊女學校長

渡

邊

滋



## 針供養に就いて

### 針供養の大意

昔江戸時代に針供養といふ儀式が有つたが明治時代に殆ど廢絶したのである、今又夫を再興せんとする氣運があるので、簡単にそのあらましを述べ記すと、其日は十二月八日、若くは二月八日の一方、又は兩日とも、女子若くは針を扱ふ男子とも其業を休み、年中使用した折針さび針を集めて床上に飾り（餅、菟藟うさぐさの如きものに横にさすもあり）燈を點じ供物をして、之を禮拜し、六質むつち汁じゆを饗し、一日の業を休み、後其針を淡島神社あはしまに納めて式を終るのであつた。

日

十二月八日か二月八日かについて、説がまちまちなので夫を調べて見ると貞享四年（丁卯皇紀二三四七）貝原篤信の「日本歳時記卷七」十二月八日の部には竈を祭る事はあれども針供養の事は無い（後文に出す御事始御事納の事も無い）

同書二月八日の部には、釋迦しやくわの誕生たんにんじやう日の事があつて、又御事納も、針供養の事も無い、其



の頃にはまだ夫が無かつたのか、但しは記載に漏れたのか分らない。

然るに八犬傳の著者瀧澤馬琴（嘉永元年戊申皇紀二五〇八、八十二歳で歿した）の纂輯、藍亭青藍俗稱金兵衛増補の俳諧歳事記葉草（孝明天皇嘉永二年庚戌九月皇紀二五一〇）（青藍の自序を載せ同四年上梓）には

二月 事始針供養六質汁八日の武江（武藏江戸）の俗、二月八日を事納とし十二月八月を事始といひて、竹竿の先に目筈をかけて、家々の軒に出、し又牛蒡、芋、大根、赤小豆等の六種を煮て汁とし、これを六質汁と名づく、婦人は針の折れたるを集めて、淡島の社へ納め、一日糸針の業を停む、是を針供養と云、其由来いまだ詳ならず、十二月八日を年頭嘉祝の事始めとし、二月八日を事納めとするは、近世の誤也、冬のこの部事納の條見るべし。

十二月 事納八日用捨箱三卷、柳亭種彦著、調天保十二年辛丑（皇紀二五〇一）の著無任雜談集、無任は鎌倉の禪僧、雜談集は其の著す所、正に云、むかしは寺々只一食にて朝食一度しけり、次第に器量弱くして、非時と名づけて日中に食し、後には、山も奈良も三度食す、夕のをば「事」と山には云へり、未申の時ばかりに非時して、法師ばら坂本へ下りぬれば、夕方寄合て「事」と名づけて、我々世事して食すといへり」と云ふ事を載せたり、按ずるに十二月は日の短き頃にて、年の暮は事せはしくなる故に八日を限り二食と

なるか當時の僧家の風俗にして、「事納」ととなへ、二月八日は日も漸くながくなれば八日より三度食するを「事始」といひしにあらすや。

江戸鹿子 六冊、貞享四年丁卯藤田理兵衛著（皇紀二三四七）

貞享二月八日「事始」十二月八日「事納」今の俗二月を「事納」十二月を「事初」めとおもふもあるなり、正月の式にかゝはりし事にはあらず云々〇金公事をつくづくにして事納山店、此外十二月を事をさめといへる證句多し、今日いとこ煮を食す。

還魂紙料 二卷柳亭種彦の隨筆、文政料理物語三〇三武州狭山にて寫木に云、いとこ煮、あづき、牛蒡、豆腐、芋、大根、焼栗、くわゐ、など入れ、中味噌にてよし、かようにおひおひに煮申によりいとこに敷」とあり、追々に煮る甥々に似るとことばの通ふを以て従弟煮となづけしなるべし。

月並世話 戸口に籠をつるは、方相の目になぞらへ、邪氣をはらふ事なり云々、一説おこるとに籠をつけるは九字のかたち也云々、春のこの部「事始」の祭をかよはしみるべし。

とあつて、針供養と御事納御事始とは、今日に混合せられて居るが二月事始（針供養六質汁）八日とあり、十二月事納とあつて、十二月の方には針供養の事が書いて無いから、二月の方かとも見られるが、二月の記事の中を見ると、武江（武州江戸）の俗二月八日を事納とし（此文切れず）十二月八日を事始といひて、竹竿の先に目筈をつけて云々と続け、



二月八日にも十二月八日にも、其事のある様にも見える、如何にも曖昧な書き方で判然としないが、俳諧の方では、専ら二月八日を針供養として居るとの事である。長翠の句に「如月や若き女の針供養」とあるは、これを證するに足る。

又無住雜談集に、寺にて夕の食を「事」と云ふことがあるが、夫はさもめらむ、然し夫が茲に云ふ「事始め」「事納め」の起原とも思はれない、この正月の儀式に關する事を、特に年中の一大事として「事」と稱へた事は天明元年辛丑（皇紀二四四一）十二月油幕庵木雁子鶴川藤文の自序ある華實年浪三餘抄冬の部卷の三に

正月事始、延喜式大政曰、凡元日天皇受皇太子及群臣朝賀、辨官預仰、諸司、辨備、庶事裝束辨史等行事、前月十三日大臣預點、殿上侍從四人、左右各二人、少納言二人、奉賀奏瑞各一人、簡從四位已上堪事者、爲之奏聞定之云々、事見式紀事曰、十三日正月萬事之經營始修、之俗是謂事始日、正月所、用之物亦多買、之始修之俗是謂事始日

とあつて日は前月十三日、八日ではないが、事始を十二月にするは由來の久しい事のやうに思はれる。

江戸鹿の子の二に、十二月十三日御事納御祝とある齋藤月岑幸成編纂の東都歲事記天保九年戊戌年（皇紀二四九八）には

二月八日 正月事納め、家々策目籠を竹の先に付けて屋上に立る（或は事始といふ）

十二月八日 正月事始、世俗お事と云ふ）家に策目籠を竿の先に付けて屋上に出す。

二月八日の事とし又今日を事納とし、二月八日を事始めとするは可ならざる由、惣鹿の子名所大全に既に云へり、されど中古よりも、かくとなし來りしにや、芭蕉庵小文庫に載する冬の句に

一兩や相場の替る事納め 嵐井  
身代も籠で知れけり事納め 史邦

とあつて（針供養の事はないが、二月を事納め、十二月を事始めとして居る。

還魂紙料に引いた、料理物語のいとこ煮の説は餘りにこち付けで、滑稽である、矢張お事煮で、お事始め、お事納めの日に煮るからである、夫を誤りていとこ煮としたまで別に深い意味は無い（針供養には關係は無いが、序ながら辨じて置く）

淺草觀音の境内にある、淡島神社に就いて、針供養の事を尋ねたるに答へに曰く「久しく中絶して居たものを、近又始めかけて來ましたが、二月八日のやうです」と判然しない。尙同社の傍に六角堂が有つて（本書初版出版の頃）一ヶ年中に參拜者が澤山に奉納する缺け針を其の中に納める、堂の下には大きな穴でもあるらしく、幾ら入れても支へないと云つて居た。



之を要するに十二月八日か、二月八日かは尙考究の餘地があつて決定は出来ない。

式

床上に机を置き其上に缺針折針さび針等の廢針を飾り、或は横に伏せ、又餅、菟藷、豆腐等の柔かきものに刺す、これは安臥せしめるとか、柔かきものに刺して勞苦を休めるやさしい心の現れである、之に供へるものも地方により色々であるが、とにかく勞苦を犒ふ意を顯すことは同じである、燈を灯す。

全家の男女仕事を休むこと、これ又各地同様、日は一日で、支那の歳事記にある社日に鍼線を停むると云ふも同様、但し自休むと、針を休めると意義は異り、佛の方では供養といひ、神事には祭りといふ。

供養

クヤウとは、佛、法、僧の三寶を資養する爲に、燈明、飲食、資財を奉ることである、色々々のクヤウがあつて、百姓が蟲を多くころすから、と云つて、地方により虫くやうなどするところがある。

祭り

神社の方にては針祭りと稱するが大略同じ様である、只神より借りたる針を、この日に集めてお返し奉賽報恩する意味であると云ふ。

祭神

針祭りの祭神は淡島明神である、婦人の病を祈るに靈驗ありとて諸國に所謂淡島様として祀られる。紀伊國海草郡加太村鎮座の（式内）加太神社を、即ち淡島明神と稱して勸請するもの。加太神社の祭神は少彦名命で、昔この神大己貴命と力を協せて天下經營の爲に努力せられ、又病を療むるの方を定め、又生物の災異を攘はんための禁厭の法を定められた、その後、命は行いて熊野の御崎に至り遂に常世の國に適かれた、又云ふ、同地友島の古名淡島に至られた時粟莖にのぼり彈かれ渡りて常世の國に至りますと云ふ、夫でその地に淡島明神と崇め祭りしを、後に加太の地に遷すと云ふ。俗に淡島明神は住吉明神の妃で帶下の病によつて淡島に流されたまふ、故に世人の病を守り玉ふ誓願を起されたと云ふのは「神代卷」に伊獎諾尊の國を生む條に淡島を胞とし給うたと云ふことと、中古この地が住吉神社の神領で有つたことから附會したものらなんといはれる。里俗には粟島様は波利塞女様で十六才の春三



月三日に齒を染めて往吉の神に嫁せられ、其時紀の御崎から攝津の住吉浦まで干潟となり、神女はそこをお通りなされた。處がこの神三熱の病が有つて夫婦の道障りある事を歎き、形代を作つて夫婦の道を學び給うた。今専ら祈願の女子等人形を作りて奉るのは、この由縁であると云つてゐるが、附會も亦甚しい。又本朝「怪談故事」などにこの島に流されの御身となつてお出での時には綾の巻物、神樂の太鼓を天の岩橋に積んで、この流されのお身と云ふことで、この神に申し子の願をかける者の間にその意味の民謡がうたはれてゐる、この神の信仰は、元祿の頃アハシマと呼ばれる一種の乞食が、手に淡島大明神を安置した小さな神棚に、紅紫とりどりの小切を結びつけたるを持ち、聲高く淡島様の縁起めいた事を唱へて、諸國を巡回して、女人の帯下を病むものに、祈願して病苦を免れよと勸進して歩いたことから、一層民庶の信仰をたかめるに至つたことである。

又別に地理上の淡島は鳥取縣米子市の西北約四軒の海にあつた島、元出雲に屬して居たが今は夜見が崎半島の一部となり西伯郡彦名村と成つた、蓋し少彦名命の故事によりて村名を附したものである。

### 各地の針供養

福岡縣

舊曆十二月八日に針供養を行ふ。この日は一家のものゝ裁縫道具を集めて、床の間に飾り、折れ針は全部豆腐にさして床の間にかざり、色々な御馳走を作つてお供へする。ローソクに火をつけて、この夜は一家の者が、この前で一年中の感謝をのべつゝ、お食事をとり、御食事後はお供へ物や、豆腐にさした折針、又はさび針を、全部川に流すか、又は庭の隅にうづめる勿、論この日は朝から針の使用は、絶対に禁止するのである。

宮崎縣延岡地方

二月八日に行ふ

一日中針を使ふ事を休み、針箱、糸巻、針山等を整理して、各々の針箱を床の間に飾り、中央に折針を蒟蒻に刺して置く。その前に色々な御馳走を並べる、疊職、仕立屋の如く殊に針の恩を受ける家は、一日中供養するが、普通の家は夜だけ休み、家内中が又人を招待して、歌留多等をして楽しく遊ぶ。

新潟縣

十二月八日に行ふ

裁板の上に、針箱、物指、鋏、くけ臺等の裁縫用具を、全部飾りて、燈明線香を上げて、お祭りする、又夜は御馳走をして、お膳を裁板の上又は側に供へて、家中も同じ御馳走をいたゞく、お供へした御馳走は必ず女が翌日頂く。



山梨縣中巨摩地方

十二月八日に行ふ。

其の日には針は一切使はない。そして、女子は自分の使ひなれた針を、全部蒔藁にさして、神棚にさしげ、神様に、裁縫が上手になる様に祈り。其の夜は一家揃つて、お供物御馳走をして、お祝ひをする。陰曆十二月八日にするので、太陽曆の御正月になる事が多い。

兵庫縣姫路地方(學校)

二月八日に行ふ

講堂に祭壇を設けお三寶に豆腐をのせ、一年中に出来た損じた針を、全部さしてまつり、色々の御供へ物をする。先生方及び生徒一同が集つて、心から針に對し感謝の意を表し、其の時裁縫科受持ちの先生及び生徒代表の、針に對する起原製法、用途、使用上の注意のお話がある。(尙此外各地に色々異りたる風習あるべし、御報告を望む増訂第三版の節に採録します)。

## 結 び

前諸條の如く、行ふべき日にも異説があり、式も地方により、時代により様々であるが、夫れは何れでも、宜しきに従ひて行ふがよろしい。只其精神を忘れてはならぬ、其精神とは報

恩の念である、其報恩の念が古今で解釋が違ふ、成程今でも物を貰へば返禮をする、金を借りたら返金する、利子も付ける、元金を引き、利子をまけて貰へば、有り難うとお辭儀をして、夫以上にはすることはない、其間に恩だの報いだのと云ふことは、成り立ちやうがない世には天地の恵みなど云ふものもあるが、太陽から商ひの資本を借りた覚えもなく、月から一飯でも恵まれたためしがない、天地の恩など云ふことは、唯説教上の空言だとは、今日の解釋、然るに昔の人の心持ちは之に相違して、父母は申すに及ばず、天地山川國家草木衆生、この世にある程のものは、一切我に關係あるもので、皆恩がある、君父の上に對するのみでなく、我と平等の朋友でも、乃至は、己れ以下の下男下女に至るまで、この世の中はお互である、下女下男は給料を與へて雇つたもの、用がすめばお暇、すべては夫れで終り、借りも貸しもない、恩だの報いだのと云ふことは、ある筈はない、給金の残りはない、有らば請求するがよい、不足であれば、少しも呉れてやらう、と云ふのが現時、況して一錢に何本と云ふ針、折れたら、すてる、曲つたら、うつちやれ、さびたらすてる、金を出して買つたら我が物、すてやうが折らうがそれは我が心と云ふのが西洋流の現金主義、處がさう思はぬが日本人、金で買ったものでも、折れてもさびても、我が物として一旦使用したものは、我と關係あるもの、用が済み次第入用はない、況してかけたりさびたりして使へぬものは尙更かまはぬと云つて捨てはせぬのが日本思想、一年に一度はこれを集めて報恩の祭り供養も



すると云ふのがお互の心の誠、その心持のある内には、會社のストライキ、主従金銭の争ひはありやうはない、この針供養の思想が絶えてから、上下相互の間は算盤攻めとなり、階級戦争などと云ふ忌はしいものが起り、混乱して拾収が付かざる有様、其内に氣の付いた人の間に、日本流の考が沸き、針供養針祭りなど昔流の事を始めるに至り、其起原は何うの、方式はどのと云ふ事に成つたのである、起原は支那にあらうが、供養と云ふ詞が佛教の詞であらうが、夫にはかまはぬ、日本人の固有の思想が沸き出たのである、其始めも支那にあるにしても、固有の思想が有つたので、夫を採用して創めたものである、針供養を行ふと同時に、其他にもこの思想を推及すれば主従平和、社會安穩、忌はしい社會相が忽ち美しい世の中となるであらう、加太の淡島神社の方では針祭と云つて、世の中のものはずべて神様より借用したものである、用がすみ又折れたり曲つたりしたもののは、まとめて大切に報いをして、返納すべきであると云ふやうに、説かれて居る、何れにしても心は同じである、ゆめ忘るべからず、我が周囲、何れに對しても恩を忘れてはならぬことである、この供養や祭が復興して來たことは、空しい谷に足音がする、唯か來たやうに思はれてなつかしい、これでこそ、我が日本も二一天作、五から三ひく二が残るの流儀から救はれることであらう。(この事に就いて尙語るべき事がある第二版の發行に際して説述すべきであらう)。

### 針供養に關する句

離れ住む友も交へて針供養  
 冴え返る風にこぼれぬ納め針  
 婢も供養の針の長みじか  
 納め針を呑みて暮れ行く流れかな  
 納め針包みて胸に抱きけり  
 數へられつあはれ錆び行く祭り針

和	子	波	那	女	青	畝	八	重	女	千	代	子	一	重
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

(追記) 前記の不足及後れ得たる材料等は他日集めて發行することあるべし。

終り



昭和九年十二月十五日印刷  
昭和九年十二月二十日發行

定價金 15 錢

著者並  
發行者

東京女子專門學校 研究部  
渡邊女學校  
代表者 渡邊 滋

發行所

東京市本郷區湯島六丁目  
渡邊女學校出版部  
振替東京一九八二〇番

印刷人

東京市淀橋區西大久保三ノ一〇六  
山口誠造

K70.8  
Kc45

05.

2051353

博物館



K70.8

Ke45

8

**S**

2051353